

老いとともにも

厚生労働省が指針を決めて市区町村が実施する「がん検診」の対象には年齢の上限がない。しかし、検査には高齢者特有のリスクもあり、利益より不利益が上回るという指摘もある。海外では上限を設ける国もある。高齢者のがん検診をどう考えたらいいのだろうか。

高齢ほどリスク高く

さいたま市南区の病院「ただとむひろ胃腸科肛門科」には、大腸がん検診で「精密検査が必要」と言われて来る80歳以上の高齢者が時々いる。厚労省の指針による大腸がん検診は、便を調べる便潜血検査と、「要精検」と判定された人を対象にした大腸内視鏡検査の2段階。大腸のX線検査をすることもある。

英国では年齢に上限

の渋谷大助所長は「水分を十分取らない人や便秘が増える高齢者はリスクを考慮すべきだ」と指摘する。日本消化器がん検診学会による2013年の調査報告では、X線による胃がん検診の受診者381万人余りのうち、腸閉塞を起こした人が10人、腸管に穴があいた人が6人いた。6人のうち5人は60歳以上。バリウムが排泄されず、硬くなって腸の壁にとどまったためとみられる。がん検診を実施している大阪がん循環器病予防センター(大阪市)の池宮城哲恵子調査室長は、高齢者から「検査はいつまで受けたらいいですか」と聞かれると「検査をつらいと感じない元気な間は、お越し下さい」と答える。年齢や過去の病歴、歩き方、表情をみてリスクがありそうな人には「検診を受けて、かえって体調が悪くなつては検診の意味がないですよ」と説明する。高齢者の場合、検査に不安を感じているようであれば、受診は勧めないという。

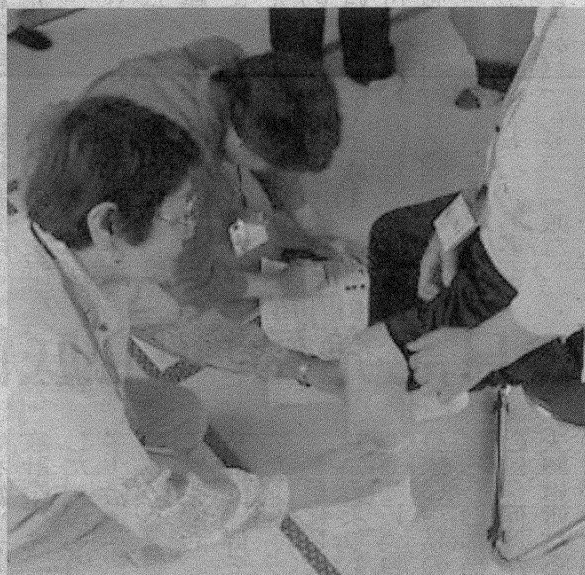
父江さんは「70歳を超えたら、がん検診を受けないという選択もある」と話す。海外では上限を設けている国もある。「国民保健サービス(NHS)」のもと医療費の多くを税金でまかなう英国では、大腸がんは74歳まで、乳がんは70歳までが対象だ。医療研究を評価して推奨度を決める「米予防医学専門委員会」では、がんによる死亡リスクを下げるという観点から、がん検診の有効性を検証している。子宮頸がんは65歳以上、大腸がんは85歳以上では推奨せず、75歳以上の乳がん検診は「科学的根拠が不足」とする。

どのリスクを考慮しなくてはならない。病院の多田智裕・理事長は「90歳で大丈夫な人もいるが、個人差は大きく、検査しても大丈夫だろうかと思う人はいる」と話す。CTで大腸を調べることが可能で、リスクを説明しただろうと本人に決めてもらうという。

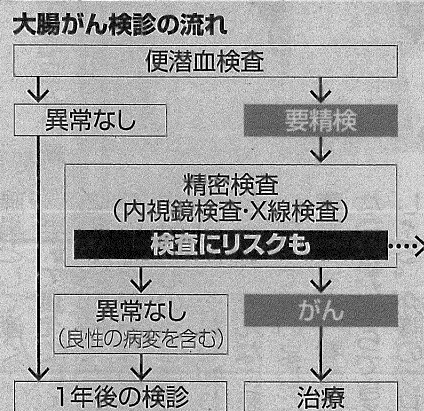
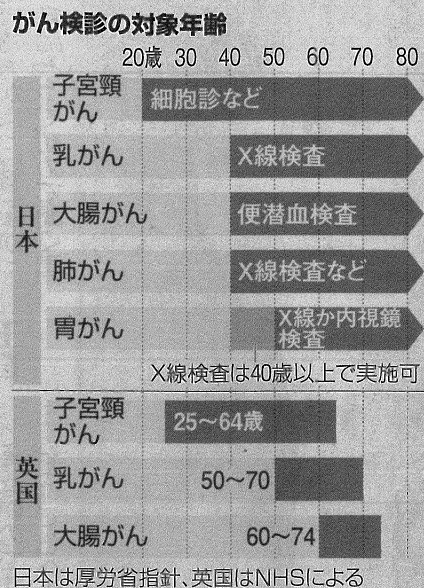
高齢者の場合、がんができた場合、手術や治療を受けることになり、後遺症や副作用が出れば、結果として生活の質を損なうことがある。大阪大の祖父江友孝教授(環境医学)は「がん検診にも利益と不利益があり、高齢者は不利益が利益を上回ることもしばしばある」と指摘する。検診でがんが疑われても、精密検査でがんではないと判明することもある。この場合、結果が出るまでの心理的なストレスや結果として必要なかった検査を受けることは「不利益」ともいえる。祖父江

ただ、自治体レベルでは独自の試みもある。大阪府では、はがきなどで個別に重点受診勧奨をする対象を、胃・大腸・肺がんは60、69歳、子宮頸がんは25、44歳、乳がんは50、69歳とした。国の指針に基づいてすべての対象者を網羅する検診の提供体制がないため、がんの罹患率などを考えて、受診勧奨の対象を決めたという。

がん検診 何歳まで受ける？



フレイルチェックの試みで、ふくらはぎの周囲を測って筋肉量を推定する。千葉県柏市、飯島勝矢さん提供



まず体力・筋力維持を

がん検診以外に、生活習慣病の早期発見のために血圧や血糖、肝機能などをチェックする健診が実施されている。40歳以上75歳未満の人は国民健康保険など公的医療保険による特定健診(いわゆるメタボ健診)を、75歳以上の人は後期高齢者医療制度による健診を年1回受けられる。

構の飯島勝矢・准教授(老年医学)は「高齢者でも定期的に健診を受ける必要があるが、栄養や食、食べる機能、身体機能が、社会参加などを維持する工夫も必要だ」と話す。高齢になるほど生活習慣病の予防に体力や筋力を維持する必要があるという。

日本老年医学会は、筋力や活動性が低下して介護が必要になった。◆「どうしました」は休み

になる前の虚弱状態を「フレイル」と呼び、生活機能を維持させることの重要性を訴える。政府が5月にまとめた「一億総活躍社会に向けた計画」にもフレイルの予防や対策が盛り込まれた。飯島さんらグループでは千葉県柏市などで筋肉などを調べるフレイルチェックを試験的に実施している。(浅井文和、瀬川茂子)